



2000年度第1回コロキウムについて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10067

2000年度第1回コロキウムについて

本年度第1回のコロキウムは、アメリカの写真家ローリー・トビー・エディソンさんと、その協働者であるデビ・ノトキンさんをお招きして、11月19日に行なった。参加者は20人ほどであった。全体テーマは「美術機構、芸術の規範と、女性アーティスト—抵抗的活動の可能性を考える」とし、アメリカからのお二人に加えて萩原も発表した。企画の目的は、美術界の周縁で創作する女性アーティストにとって、既存の美術機構や芸術の規範にとりこまれることなく、それに抵抗しながら、広く人々と作品を共有していく新しい芸術の可能性を探るうえで、コミュニティとの関係や交流がもつ意味を考えようということにあった。女性表現者が主流の美術機構から周縁化されてきたのはまちがいないとしても、いま必要なことは主流の美術機構が用意する限りあるパイを女もとりあうことではないというのは、前号掲載のコロキウムでとりあげたルーシー・リップパードも言っている。女性アーティストの権利伸張にとどまらない芸術の変革を求めるなら、創作の過程から展示の方法にいたるまで、徹底した検証と再構築が必要になるだろう。エディソンさんは、人の生きる経験のなかから創りだされる芸術表現を重視し、そこに挑戦的な意味を見出しているアーティストである。人は孤絶して生きることはなく、なんらかのコミュニティのなかで生きるものだから、芸術表現にも、そういう存在としてとりくむと、エディソンさんは言う。そういう彼女の姿勢に促されて企画したのが、このコロキウムであった。

エディソンさんは、1996年に東京都写真美術館で開催された展覧会『ジェンダー—記憶の淵から』で発表された *Women En Large* シリーズで日本でも知られるようになった。同シリーズは太った女性のヌード写真で、身体美の狭い規範に縛られる苦しみからの解放をめざすアートとして高い評価を得てきた。ノトキンさんは作家および編集者を業とする方で、エディソン作品では写真につけるテキストの監修をする一方、モデルとしても協力されている。このコロキウムは、2000年秋に京都精華大学ギャラリーでエディソン展が開催されたのにあわせて来日された折に実施したものだ。京都精華大学では、新作の男性ヌード・シリーズ *Familiar Men* を中心と

する展示が行なわれた。ほぼ同時期に、大阪市内の写真ギャラリー「サード・ギャラリー綾」では、*Women En Large* の小展も行なわれた。2001年夏には国立国際美術館（吹田市）での大規模な個展が決まっていた、エディソン作品に多くの人々が接する機会の増えることを嬉しく思う。

エディソンさん、ノトキンさんの発表は、その後に原稿化していただき、ここに翻訳掲載している。発表のタイトルは後掲文のタイトルと同じであった。エディソンさんをお願いしたのは、女性の状況も含めての社会変革を課題として生きるフェミニスト・アーティストが、これまでの芸術創作とは違う方法、違う過程を踏んで作品をつくっていることを、実作者自身に語ってもらおうと願ったのである。普遍的な美を追求する卓越した異能をそなえた孤高の創造者といった芸術家像は、いまやかなりかび臭い神話と化したかもしれないが、芸術創作を第1に担いうる者のイメージはいまだに男性中心的だ。また芸術の社会性については、数多くの提起がされてきたにもかかわらず、社会から遊離した高踏的な芸術観は、特に日本では、それが芸術市場との折り合いがよいこともあって、いまも力をもっている。エディソンさんは自身の創作活動にとってコミュニティの存在がもつ重要性を具体的に語られた。

ノトキンさんは、1950年代から現在にいたるまでに、自身が参加されたアメリカ社会でのコミュニティ経験と自己形成をふりかえる発表をされた。なかでも60年代からのヴェトナム戦争反対運動や女性解放運動などの、いわば「運動コミュニティ」での経験は、時代の空気を伝える歴史証言として意味あるものとなった。ノトキンさんと同じ1951年生まれで、ヴェトナム戦争の時代に、近所に米軍基地のある地域で10代後半から20代前半を過ごした萩原にとって、アメリカと日本という違いはあっても、いろいろな共通点を感じたお話でもあった。

このコロキウムについては討論のまとめがないのは、エディソンさんもノトキンさんも、交わされた討論の内容をよく反映して原稿を作成してくださったので、あらためての討論報告は不要となったためである。ただしここで簡単に、掲載を省略した萩原の発表と、エディソン原稿に含まれなかった論点、そして「コミュニティ」という概念についての報告はしてお

く必要があろう。

まず萩原の発表は、ロンドン在住の女性アーティスト、アリスン・マーチャントがロンドン東部の行政のためにつくったパブリック・アート作品 *East Londoners* に関するものであった。これは南アジアやアフリカ、西インド諸島、東ヨーロッパなどからの移民集住地区であるイースト・ロンドンの3行政区（ニューハム、ハックニー、タワー・ハムレッツ）が、同地区を形成してきた移民を含む多様なコミュニティの存在を可視化しようという新千年紀記念の企画である。マーチャントは、地域コミュニティ、種々の移民コミュニティ、そして歴史的に貧困労働者階級の多い地域である同地区の各地に拠点をつくって、定期的にその地の人々と対話を重ね、彼らの家族写真を借り出し、最終的には街の数百の巨大広告版や行政の公式ウェブサイト上にそれらの写真と、彼らの歴史を展示、掲載した。一般に「イースト・ロンドン子」といえば、アジア系やアフリカ系はイメージしないものだが、実際にこの地域コミュニティをつくってきた人々のなかで、彼らを含めて移民コミュニティは重要な存在なのである。マーチャントの作品の意味は、その地区のイメージと歴史を書き換えることにあった。地域、移民、階級のコミュニティに関わるマーチャントの仕事の意味は、エディソンさん、ノトキンさんの話と響きあい、コロキウムは面白いものになった。しかし紙数の制約もあって、研究者としての取材をもとにしての萩原の発表は、当事者性という点で二の次と考え、ここでは省くことにした。

コロキウム討論で参加者から出た質問への答えのなかで、最終的な原稿に含まれていなかった重要点が1つある。質問は、エディソンさんに対して向けられた、なぜ裸像なのか、というものであった。エディソンさんの2つのシリーズではいずれも被写体が裸である。美しいとは痩せていることという美の規範に疑いを投じ、さらにはそれに抵抗、反撃するイメージの提起である *Women En Large*、そして男たるもの、そなえているべき男らしさや、男性的な相貌があるという男性性の規範を掘りくずそうという *Familiar Men*、どちらもその創作意図は裸像でないかと果たされないのか、というのが質問の主旨であった。エディソンさんが、かなりの熟考ののち

にされた答えは次のようなものであった。「まだ戦争中の1942年にアメリカ東部で生まれ育ったユダヤ人の自分にとって、小さい頃に数多く見たナチスによるユダヤ人虐殺に関わる写真は、その後の自己形成において重要な意味をもった。裸の体がまるでボロ布のようにされたのを写真で見て、裸の体を尊厳あるものとして表現することは、アーティストである自分の大きなテーマとなったということだと思う。実はこのコロキウムで、なぜ裸像なのかと尋ねられるまでは、この問題を真剣に言語化しなかったことに気づいた。これからも考えていきたい。」

なお、コロキウムはすべて英語で行ない、いっさいの通訳はつけなかった。しかしお二人からの原稿が届いて、翻訳する段階になって気づいたことがある。それは community という英語にふさわしい訳語はないということである。辞書には「社会、共同体」といった訳語が載っているが、いずれも今回は役に立たない。英語で考え討論しているときには気づかなかったが、これは日本社会には、国家的帰属とは関係のない、規模の大小を問わない、また結束する原理の一貫性を問わない（つまり、所与でも選択でもよい）集合の概念がないということかもしれない。community という英語は、お二人の原稿からもわかるように、かなり幅のある概念で、選択の余地なく生まれついた家族、親族も、もう少し広いユダヤ人社会もコミュニティなら、同好の志が集まるサークルも、政治運動のグループも、美術界もコミュニティである。「仲間、人のつながり、共同体、人々」などといった語を、初出には括弧書きで入れておいたが、訳文中は「コミュニティ」とした。翻訳は本来なら専任・兼任研究員で分担すべきところだが、諸般の事情から今年度は手が足りず、エディソンさんの原稿は萩原が翻訳したが、ノトキンさんの原稿は本学大学院修了生の奥村ゆかりさんに訳していただいた。ヴォランティアで仕事を引き受けてくださった奥村さんには、心から感謝している。

(萩原弘子)